

- 宮城県植物目録2000. 石巻.
- 舩山泰一 1954. *Elaeagnus submacrophylla* について. 植物研究雑誌 29: 347-348.
- 1989. グミ科. pp. 83-89. 佐竹義輔他 (編): 日本の野生植物 木本 I. 平凡社, 東京.
- Ohba H. 1999. Elaeagnaceae. In: Iwatsuki K., Boufford D. E. and Ohba H. (eds.), Flora of Japan IIc: 152-158. Kodansha, Tokyo.
- 大井次三郎著, 北川政夫改訂. 1983. グミ科. pp. 1051-1057. 新日本植物誌 顕花篇. 至文堂, 東京.
- , —— 1992. グミ科. pp. 1051-1057. 新日本植物誌 顕花篇. 改訂版. 至文堂, 東京.
- 吉田 繁 1984. 温暖帯植物マルバグミ陸前高田に産す. 岩手植物の会会報 (21): 1-4.
- 1985. 陸前高田沿岸部の植物—広田半島を中心に—. 岩手植物の会会報 (22): 6-13.
- 1989. 温暖帯植物ナワシログミ陸前高田に産す. 岩手植物の会会報 (26): 27-30.
- (^{*}東北大学大学院理学研究科
附属植物園津田記念館,
^{*}岩手県陸前高田市米崎町字沼田 85-5)

オオナワシログミについて (大橋広好)

Hiroyoshi OHASHI: Notes on *Elaeagnus ×submacrophylla* Servett. (Elaeagnaceae)

別報で吉田 繁氏とともにオオナワシログミの北限分布について報告した (大橋・吉田 2003). 本報告では本種の分布, 学名, 雑種性について整理した. まず本種はすでに四国からも記録されているが, 日本の代表的な植物誌では分布域として四国が欠けていることを指摘しておきたい. 次にその正名および学名の変遷について整理してみた. 本種は雑種とされ, *Elaeagnus ×submacrophylla* Servett. が当てられている. この学名は1908年の発表とされるが, 正式には1909年に発表されたものである. 最後に本種を雑種とみなす根拠をさらに明らかにする必要のあることを指摘した. なお, *E. ×submacrophylla* Servett. にはフグミなる和名も使われたが (舩山 1989), 本報告ではオオナワシログミと呼ぶこととしたい. *E. ×submacrophylla* を *E. nikaii* Nakai と同種とみてこの学名にオオナワシログミを用いた原 (1954) と舩山 (1954) に従った.

本報告をまとめるに当たりオオナワシログミの標本を送って下さった吉田 繁氏, 文献についてご協力いただいた東京大学邑田 仁教授と農業技術研究機構池谷裕幸博士ならびに徳島県の分布について調べて下さった徳島県博物館茨木 靖氏にお礼申し上げる.

1. 四国のオオナワシログミ

主な植物誌では, オオナワシログミの分布は本州 (紀伊, 長門), 南朝鮮 (大井 1953, 1965), あるいは本州 (関東地方以南), 九州,

朝鮮南部 (大井・北川 1992), あるいは本州 (関東地方以南, 太平洋側), 九州, 伊豆諸島 (Ohba 1999) とされている. このように四国は分布域に含まれていないが, 既に「高知県の植生と植物相」 (山中 1978) によって高知県でオオナワシログミの2産地 (土佐清水市と沖の島) が報告されている. これらの2地域からは推定両親種とされるマルバグミもナワシログミも共に記録されている. 故山中二男博士が遺された標本は東北大学大学院理学研究科植物標本室 TUS に総てが寄贈されており, 目下整理中である. 山中 (1978) に挙げられている種類はほとんど博士の収集した標本に基づいているので, 高知県産オオナワシログミの証拠標本も TUS にあると思われるが, まだ貼り付けられていないので現在は確認できなかった. また, 徳島県にも知られており (阿部 1990), 茨木氏によれば徳島県博物館標本室 (TKPM) には徳島県阿南市伊島 (阿部近一), 徳島県海部郡中木頭村平谷 (赤沢時之) の標本があるという. 四国の他の2県にも分布する可能性が高いと思われる.

2. オオナワシログミの学名

オオナワシログミの学名として *Elaeagnus ×submacrophylla* Servett. あるいは *E. ×nikaii* Nakai が用いられている. オオナワシログミは Nakai (1918) が自然種として (雑種ではなく) 記載した *E. nikaii* に対して名づけた和名である. *Elaeagnus ×submacrophylla* という

学名は ナワシログミの種内分類群の検索表の中で、マルバグミとナワシログミとの雑種または変形 *mutationis forma* として、“×(?)*E. submacrophylla* Servettaz”という形で初出した (Servettaz 1908). しかし、これは裸名であり、翌年正式に“*E. submacrophylla*? Servettaz”と発表された (Servettaz 1909). この学名は中井 (1928) が朝鮮のグミをまとめたときにオオバツルグミに用いて、*E. hisauchii* Nakai (= *E. hisauchii* Makino ex Nakai) をそのシノニムとしたことから日本でも使われるようになり、大井 (1953, 1965b), 村田 (1971), 大井・北川 (1992) で採用されていて、*E. ×submacrophylla* はマルバグミとツルグミとの雑種であるオオバツルグミとされている. この考えの下ではマルバグミとナワシログミとの雑種とされるオオナワシログミに対しては *E. ×nikaii* Nakai (1918) が使われている.

一方、原 (1954) と初山 (1954) は *Elaeagnus ×submacrophylla* Servett. がナワシログミとマルバグミとの雑種であるとして、オオナワシログミに当て、*E. ×nikaii* Nakai をシノニムとした. この意見は Ohwi (1965a), Ohba (1999) で採用されている. さらに初山 (1989) はこれらと異なる意見で、オオナワシログミ *E. nikaii* とフユグミ *E. submacrophylla* は別種であり、しかし両種共にナワシログミとマルバグミとの中間形である (すなわち、雑種ではなく) と考えた. オオナワシログミは葉腋に刺がなく、フユグミには刺があるとして両種を区別した.

Elaeagnus ×submacrophylla の原標本は長崎県野母崎の岬で Buerger によって採られ、“Fou Gumi”と呼ばれたものである (Servettaz 1909). シンタイプは2点ある. Servettaz (1909) によれば、*E. submacrophylla* は外形、刺のあること、短い葉柄、波状の葉縁でナワシログミに近縁と推測し、短い鐘状の花、花柱上の毛、大形の葉、葉の上面は平滑で乾燥時には葉脈が目立たない点においてナワシログミとは異なり、マルバグミに近縁であるとした. 特に花を “limbus perigonii breviter campanulatus, infra lobos dilatatus similis *E. macrophyllae* Thbg.” と記載している. オオナワシログミとオオバツルグミの花について、大井 (1953, 1965b) の区別点をまとめると、

オオナワシログミは萼筒が四稜広鐘形、萼裂片は萼筒と等長かわずかに短い、オオバツルグミは萼筒が四稜筒形、萼裂片は萼筒の半長であるという. したがって、この特徴はマルバグミに一致し、明らかにオオバツルグミには合致していない. 既に初山 (1954) が明らかにしたように私も *E. ×submacrophylla* はナワシログミとマルバグミとの雑種であると判定する. 一方、初山 (1989) は刺の有無を種の区別点としたが、山口県植物誌 (岡他 1972) で *E. ×nikaii* には小枝に短い刺針を生ずる個体と刺針のない個体とがあると記述されているとおり、この形質には変異があり、オオナワシログミとフユグミの識別形質とはならない.

オオナワシログミの学名としては、国際植物命名規約付則 I の H.4 条に基づいて、オオバグミとナワシログミの雑種の中で最も古い名である *E. ×submacrophylla* Servett. がその正名となる. 正名, 異名, 出典, 主な文献などを次のように整理した.

***Elaeagnus ×submacrophylla* Servett. [in Bull. Herb. Boiss. ser. 2, 8: 387 (1908) in clave, nom. nud.] in Beih. Bot. Centr. 25(2): 84 (1909) [Type: Japon. Ins. Kiu-Siu. Buerger no. 384, 385 (L, n. v.); H. Hara, Enum. Sperm. Jap. 3: 241 (1954); Momiyama in J. Jpn. Bot. 29: 347 (1954); Ohwi, Fl. Jap. ed. Engl. 647 (1965); Yamanaka, Vegetation Fl. Kochi Pref. 317 (1978); Momiyama in Satake & al., Wild Flow. Jap. Wood. 2: 87 (1989), pro sp.; Ohba in Iwatsuki et al., Fl. Jap. IIc: 158 (1999).**

Elaeagnus ×nikaii Nakai in Bot. Mag. Tokyo 32: 224 (1918), pro sp. [Type: Japan. Honshu. Yamaguchi Pref., Hagi, Tsuruedai. J. Nikai 2723 (TI lectotype, photo TUS) and 2722 (TI syntype)] & Sylv. Korea. 17: 17, tab. 5 (1928); Ohwi, Fl. Jap. 806 (1953) & l. c. ed. rev. 934 (1965); Murata in Kitamura & Murata, Col. Illust. Woody Pl. Jap. 1: 215 (1971); Oka & al., Fl. Yamaguchi Pref.: 407 and 546 photo of the lectotype (1972); Momiyama in Satake & al., Wild Flow. Jap. Wood. 2: 87 (1989); Ohwi & Kitagawa, New Fl. Japan revised: 1053 (1992).

= *Elaeagnus macrophylla* Thunb. × *E. pungens*

Thunb.

オオナワシログミ (Nakai, l. c. 1918).

Elaeagnus ×nikaii Nakai は二階重楼氏から中井博士に送られてきた J. Nikai 2722, 19 April 1917 (fl.) と 2723, 3 Nov. 1917 (fr.) をタイプとして記載された。この2点はシタイプであり、岡他：山口県植物誌 p. 407 では、Nikai 2723 (TI) がレクトタイプと選定されている。そのアイソレクトタイプは TNS にある (岡他 1972)。

3. オオナワシログミの雑種性

Servettaz (1909) は、*E. submacrophylla* はマルバグミとナワシログミの中間的形態を示すもので、多分雑種であろうと考えた。Nakai (1918, 1928) はオオナワシログミをアカバグミとナワシログミに近いとしたが、雑種とは発表しなかった。しかし、その後の研究者によって上述のように採用する学名は異なっても、オオナワシログミは実体としてはマルバグミとナワシログミの雑種と考えられてきた (大井 1953, 原 1954, 初山 1954, 村田 1971, Ohba 1999)。両親種が共に分布する地方では野外で見いだされている (初山 1954)。

オオナワシログミを雑種とする根拠はそれがマルバグミとナワシログミの中間的な形態を示すためと考えられてきた。Servettaz (1909) は、前述のように、ナワシログミとマルバグミとにそれぞれ近縁な形質を示した。大井 (1953) は *E. ×nikaii* Nakai を最初にマルバグミとナワシログミの雑種と認めて、オオナワシログミは葉身楕円形、両端は鈍形またはわずかに鋭形、葉縁に鈍歯と波状歯とがあり、下面は褐鱗をまばらに混生、枝に褐鱗ありと記載した。これに対して、マルバグミは「卵円形から卵状広楕円形、またはやや円形、幅 4–6 cm、鈍頭ないし急鋭先頭にして鈍端、ときに円頭、基部円形、下面は密に白鱗あり、枝に初め白または淡褐色の鱗片あり」、また、「ナワシログミは長楕円形または狭長楕円形、幅 2.5–3.5 cm、鈍頭または鋭頭鈍端、基部円形、葉縁細歯または波状歯、下面に淡色の鱗片にまばらに褐鱗あり、枝に刺あり」としている。山口県植物誌 (岡他 1972) では、オオナワシログミは葉は卵形、楕円形または広卵形、葉縁に明らかな波曲あり、下面

は白鱗に少数の褐鱗が混ざり、小枝に刺針の有無あり、小枝の稜はあまり著しくないという。葉身については、Servettaz (1909) は葉身を卵状楕円形、長さ 85–115 mm、幅 40–58 mm、両端は鈍形から鋭形と記載し、Nakai (1918) は葉身は卵状長楕円形または楕円形、平均の長さ 95 mm、幅 46 mm とした。初山 (1954)、Ohba (1999) では長楕円形または卵状長楕円形、村田 (1971) は広楕円形、大井 (1953) と山口県植物誌 (岡他 1972) では前述のとおりである。岩手県のオオナワシログミは小枝に刺はなく葉は楕円形で、仙台市のものは小枝に刺あり葉は狭楕円形から狭卵形である (大橋・吉田 2003)。以上のようにオオナワシログミはその形態が一定せずに、むしろ推定両親種の形質を両極端とした幅広い変異を示すことによって、中間形と見なされてきた種であるように思われる。

オオナワシログミには種子ができるようである。二階氏宅には *E. ×nikaii* Nakai のタイプ株から採った種子の実生が植えてあったという (岡他 1972)。また、*E. ×submacrophylla* の原記載には、発芽可能か否か不明であるが、種子が記載されている。しかし、初山 (1954) の詳しい記載は鎌倉での栽培品に基づくが、果実と種子については記載がない。仙台市では果実ができ、子株が見られたが (大橋・吉田 2003)、本種の成熟した種子を確認していない。オオナワシログミは種子を自殖によって作るものであるかどうか、また恒常的に種子を作るのか、オオナワシログミとマルバグミやナワシログミとの間あるマルバグミとナワシログミの間には生殖的隔離があるかなど興味深い点が多い。オオナワシログミが雑種であることについては遺伝学的な確認を要すると思われる。

引用文献

- 阿部近一 1990. 徳島県植物誌. 教育出版センター, 徳島.
- 原 寛 1954. 日本種子植物集覧 3. 被子植物—双子葉植物—古生花被植物 (1). フウロソウ科→ミヅキ科. 岩波書店, 東京.
- 初山泰一 1954. *Elaeagnus submacrophylla* について. 植物研究雑誌 29: 347–348.
- 1989. グミ科. pp. 83–89. 佐竹義輔他 (編): 日本の野生植物 木本 I. 平凡社, 東京.

- 村田 源 1971. ぐみ科 (pp. 213–219, pl. 40). 北村四郎, 村田源: 原色日本植物図鑑 木本編 I. 保育社, 大阪.
- Nakai T. 1918. *Notulae ad plantas Japoniae et Koreae* XVIII. *Bot. Mag. Tokyo* **32**: 215–232.
- 中井猛之進 1928. 朝鮮森林植物編 17. 胡頹子科. 朝鮮総督府林業試験場, 京城.
- 大橋広好, 吉田 繁 2003. オオナワシログミの分布北限. *植物研究雑誌* **78**: 301–304.
- Ohba H. 1999. *Elaeagnaceae*. Iwatsuki K. et al. (eds.), *Flora of Japan IIc*: 152–158. Kodansha, Tokyo.
- 大井次三郎 1953. グミ科. pp. 805–808. 日本植物誌. 至文堂, 東京.
- Ohwi J. 1965a. *Elaeagnaceae*. *Flora of Japan*, ed. English. pp. 646–648. Smithsonian Institution, Washington D.C.
- 大井次三郎 1965b. グミ科. 改訂新版日本植物誌 顕花篇. pp. 932–937. 至文堂, 東京.
- (著), 北川政夫 (改訂) 1992. グミ科. 新日本植物誌 顕花篇. 改訂版. pp. 1051–1057. 至文堂, 東京.
- 岡 国夫他 1972. 山口県植物誌. 山口県植物誌刊行会, 山口.
- Servettaz C. 1908. Note préliminaire sur la systématique des Elaeagnacées. *Bull. Herb. Boissier ser. 2*, **8**(6): 381–394.
- 1909. Monographie des Eléagnacées. *Beih. Bot. Centralbl.* **25**(2): 1–420.
- 山中二男 1978. 高知県の植生と植物相. 林野弘済会高知支部, 高知.
- (東北大学大学院理学研究科
附属植物園津田記念館)

ツクシハギはシーボルトにより採集されていた (秋山 忍)

Shinobu AKIYAMA: *Lespedeza homoloba* (Leguminosae) Was Collected by Siebold

日本には 8 種のヤマハギ節の野生種が分布するが, 分布の限定される 3 種を除く 5 種のうち 3 種, 栽培種であるニシキハギ (またはシラハギ) とミヤギノハギがシーボルトらにより採集されていることを確認した (Akiyama 1988). しかし, ツクシハギとビッチュウヤマハギが採集されていることは確認できなかった. ツクシハギはシーボルトが滞在した長崎周辺では決して稀なハギではないので, シーボルトらがこの種を採集していないはずはないと, 疑問を感じていた.

シーボルトらの採集品を体系的に研究したのは Miquel である. 彼は 1863 年から 1870 年にかけて『ライデン植物標本館紀要』(*Annales Musei Botanici Lugduno-Batavi*) を出版し, その中で多数の新植物を発表した (Miquel 1867). 日本産のハギ属ヤマハギ節についての分類学的研究もこの時に初めて行われた. この中で, ヤマハギ節については, 5 種 (ヤマハギ *L. bicolor*, キハギ *L. buergeri*, マルバハギ *L. cyrtobotrya*, ミヤギノハギ *L. sieboldii*, マルバキハギ *L. oldhamii*) を識別し, ヤマハギ以外の 4 種 (キハギ, マルバハギ, ミヤギノハギ, マルバキハギ) を新種とし, またヤマハギでは 1 新品種と 1 新変種 (*L. bicolor* f.

microphylla, *L. bicolor* var. *pauciflora*) を記載した.

しかし, 比較的広い分布域をもち, 現在長崎付近で稀ではないツクシハギについて Miquel の言及はない. そこで, ツクシハギはそもそも誰も採集していなかったのか, それとも採集はされていたが Miquel がその独自性を見逃したのか, を明らかにしたいと思っていた. 最近, ライデンのシーボルト・コレクションを改めて調べる機会があり, この問題を検討したので報告したい.

ツクシハギは, 松村任三の「帝國産荳科植物種類一覧」(*A conspectus of the Leguminosae, found growing wild or cultivated in Japan, Loochoo and Formosa*, 1902) でも認識されるに至らず, 種としては中井猛之進により 1923 年にはじめて認知され, *L. homoloba* (ヤブハギ) として記載された. その後同じく中井により 1927 年に *L. nikkoensis* (ニッコウシラハギ), *L. retusa* (ツクシハギ) および *L. rotundiloba* (ハナキハギ), 1929 年に *L. sendaica* (センダイヤマハギ) が記載されたが, 後にこれらはツクシハギの異名と認められた (大井 1953, Akiyama 1988). また, ヤブハギの和名は, ヌスビトハギ属植物にもこの和名が